

2020 2021 2022

スポーツ庁委託事業 ドーピング防止教育・研修事業

国際総合大会ドーピング検査員 育成報告書



公益財団法人日本アンチ・ドーピング機構

目次

1.	国際総合大会DCP採用・育成の背景	1
2.	国際総合大会DCP認定について	2
3.	国際総合大会DCO採用活動	3
	募集、書類審査	3
	養成講習会	4
	集合研修会	6
4.	国際総合大会DCO育成活動	8
	研修会(導入編)	8
	研修会(中級編)	10
	研修会(国際総合大会編)	12
5.	東京2020に向けた直前の取組	14
6.	国際総合大会BCO採用・育成活動	16
7.	国際総合大会へのDCP派遣実績	17
8.	資料	24
9.	国際総合大会DCP育成に関する活動年表	25

1. 国際総合大会DCP採用・育成の背景

日本アンチ・ドーピング機構（JADA）では、2001年の設立以来、ドーピング検査員（DCP;Doping Control Personnel）*育成に取り組んできた。現在、多くの検査員が、国内・国外において活発に活動している。

一方、日本国内では今後様々な国際競技大会の開催が予定されており、国際総合大会におけるドーピング検査に対応しうる人員の確保がより一層求められる。特に東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催が決まった当初、それまで国内のドーピング検査を担ってきたDCPはもとより、大会時に諸外国・地域から招聘されるDCPの人数だけでは大会運営に十分とは言えない状況であった。

そこで、語学力を備え、国際総合大会へ対応しうるDCPを育成すべく、2017年度から国際総合大会DCP育成事業に着手した。ラグビーワールドカップ2019、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会を含む国内で開催される国際総合大会でのアンチ・ドーピング活動を成功させることを目的とし、採用活動、育成活動に取り組むこととした。

取り巻く状況と課題

国内で開催される国際競技大会の増加

ラグビーW杯、東京2020、名古屋アジア大会 等

国内DCPの不足

「人員」、「語学力」、「国際経験」の不足

国際競技大会で活躍しうるDCPの育成

東京2020をはじめとする国際競技大会での活躍

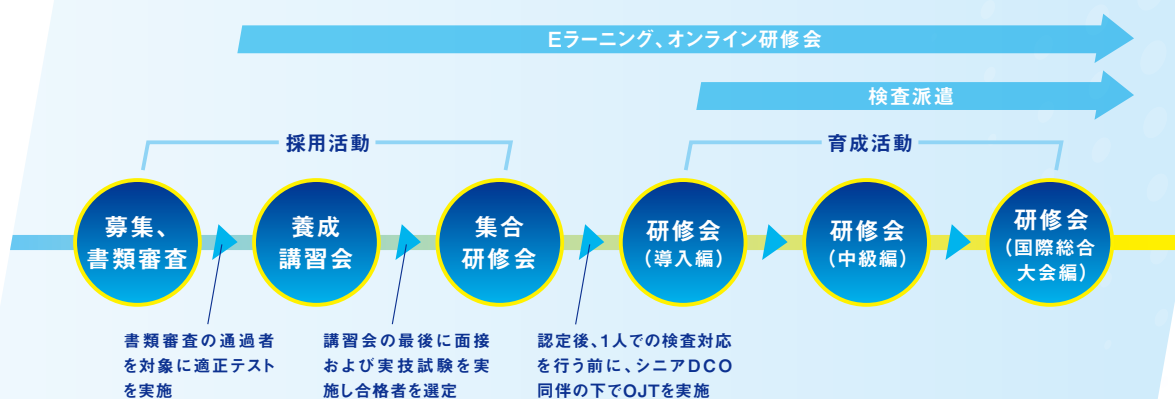
*DCP;Doping Control Personnel

JADAが認定する、ドーピング検査においてアスリートからの検体採取を行う検査員の総称。検体採取手続きを遂行する“DCO”（Doping Control Officer）、DCOの指導やリードDCOとしての業務を行う“シニアDCO”、採血を遂行する“BCO”（Blood Collection Officer）、アスリートへの通告から採尿立会までの対応が可能な“SCO”（Sample Collection Officer）が含まれる。

2. 国際総合大会DCP認定について

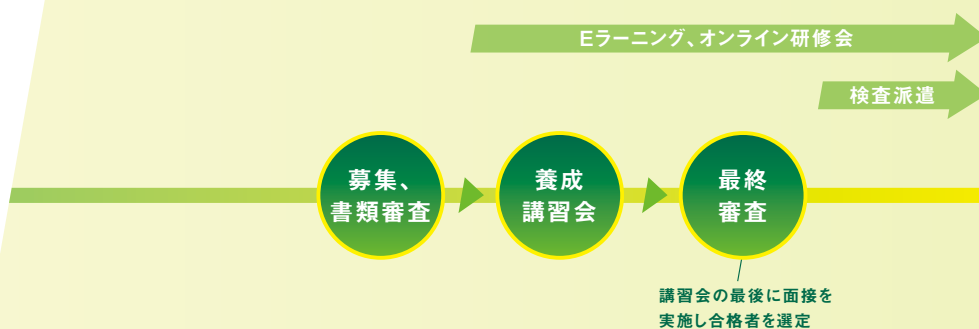
来たる国際総合大会に対応しうるDCPを育成するべく、JADAでは従来の育成カリキュラムをベースとした新たなカリキュラムを作成した。特にDCOに関し、これまでは「養成講習会」と数回の「実地研修(シニアDCO同伴)」を経て認定していたところ、新カリキュラムでは実地研修に代えて競技会検査を模した会場を設営し、受講者が一堂に会する「集合研修会」を実施することとした。これによって、従来に増して大規模かつ効率的な認定・育成活動が可能となった。DCO、BCOそれぞれの募集から認定、育成に至る流れは以下の通り。

国際総合大会DCO (Doping Control Officer) 認定の流れ



所定の応募フォームを通じた申請者全員について書類審査を行い、合格者に対して養成講習会および集合研修会を実施。全課程を経て相応しいと思われる者をDCOとして認定した。認定されたDCOは、実際の現場での経験を重ねながら、研修会において、アンチ・ドーピングに関する更なる知識や、現場での判断や現場でのチーム力を高めるための各種研修を受講し、国際総合大会に対応しうるDCOとなるべく活動する。

国際総合大会BCO (Blood Collection Officer) 認定の流れ



BCOの資格要件として「医師免許もしくは看護師免許の保有」を定めているため、基礎的な手続きの流れ等を学んだ講習会受講者(医師または看護師)をBCOとして認定。認定後に現場での活動を行い、国際総合大会までに十分な経験を積む。

3. 国際総合大会DCO採用活動

I 募集、書類審査

募集、
書類審査

養成
講習会

集合
研修会

研修会
(導入編)

研修会
(中級編)

研修会
(国際総合
大会編)

Point

DCOとしての
活動における
要件と適性を審査



JADAホームページに設けた募集サイト(トップページ)

新規国際総合大会DCOの募集はJADA公式サイト、東京2020大会組織委員会公式サイト等における告知等を通じて行った。

これを受けて、募集要件に充足するか否か、さらに検査員適性などを加味し、JADAにて書類審査を行った。募集要件には、アスリートのプライバシーに配慮する必要があるため「守秘義務を遵守できる」等の従前から設けられていた要件に加え、国際総合大会での共通言語である「英語でのコミュニケーションがとれる」といった国際総合大会に対応するための要件も設定した。

募集要項 ※ 抜粋

- 年齢が20歳以上66歳以下の方
- 守秘義務を遵守できる方
- 長時間の歩行業務に対応できる方(2～3時間程度)
- 高等学校卒業以上の学力を有する方
- 日本語でのコミュニケーションが取れる方(講習会・資料等は日本語の為)
- 対人関係を良好に構築できる方(円滑なコミュニケーションがとれる等)
- 外国人と英語でコミュニケーションがとれる方(TOEIC550点、又は同等レベル以上)
- JADAおよび大会組織委員会の理念と行動規範を遵守できる方

3. 国際総合大会DCO採用活動

Ⅱ 養成講習会

募集、
書類審査

養成
講習会

集合
研修会

研修会
(導入編)

研修会
(中級編)

研修会
(国際総合
大会編)

Point

テキストに基づき
検査の基礎知識・
技術を習得



JADAアスリート委員による講話

養成講習会の開催に先立ち、受講者にはEラーニングにてドーピング検査の基礎知識や検査全体の流れが事前学習できる機会を提供した。

プログラムは、テキスト(P24資料編)に沿って、基礎的な検査手順を学習できる構成とした(下記カリキュラム)。具体的には、検査手順を場面ごとに分けて、講師による手順解説、手順動画(P24資料編)の視聴、実技練習を1セットとして展開した。実技練習では実際に検査で使用する検査キットを使用し、受講生2人が1組となり、DCO役・アスリート役を交代で行った。実技練習中は、現役DCOが2組に1人ずつ付き、アドバイス・指導を実施した。

開催概要

【期 日】 2017年度：2017年11月 2日間（於 東京都港区）
2018年度：A日程／2018年6月 2日間（於 東京都港区）
B日程／2018年7月 2日間（於 東京都港区）

【カリキュラム】

DAY1

- アンチ・ドーピング概論
- 検査概論
- 事前準備、通告
- ドーピング検査室到着～通告書記入
- 採尿立会い
- 検体封印
- 検体封印後の作業

DAY2

- JADAアスリート委員による講話
- 部分検体採取手順
- 追加検体採取手順
- 障がいを伴う競技者への対応
- 検体搬送

*カリキュラムは2018年度A日程のもの。



実技練習風景 現役DCOのアドバイスを受けながら手順を学んだ



実技試験

講習会2日目には、JADAアスリート委員から、アスリートの立場から見たドーピング検査についての講話を行い、DCOという役割の重要性を受講者へ伝えた。

全カリキュラム履修後、実技試験および面接を実施し、次のステップである集合研修会の受講者を選定した。実技試験では、検査全体の流れを時間内に実施できるか確認し、2日間の講習会内容の理解度を確認した。面接はJADA職員が1対1で対応し、志望動機、活動可能頻度、熱意などに関するヒアリングをした。ドーピング検査特有の業務である採尿立会いに関して、改めて業務内容の理解と検査員認定の意思確認を行った。

Interview

この人たちの仲間になりたい

DCO養成講習会を受講したのは2017年。薬剤師、そしてスポーツファーマシストの資格を持っていたことから、東京2020には何らかの形で携わりたいと、応募することになりました。

講習会では、事前に提供していただいた動画を繰り返し見て臨んだおかげもあり、検査手順を無事終了できました。ただ、最も印象に残っているのは、学んだ内容よりも、場に流れる空気の爽やかさ。講話をしてくださったオリンピック、慣れない私に優しく教えてくださった先輩DCO、そして会の運営に力を尽くしてくださったJADA職員など、スポーツのクリーンさを守るために活動している人々が醸し出す雰囲気は、さまざまな社会経験を積んだ中でも味わったことのないものでした。講習会を終えた頃には「私も、この人たちの仲間になって一緒に活動したい」と思いを新たにすることを覚えています。

2018年2月に初めて現場に出てから、これまでに100回を超える検査を経験しました。最初の頃はリードDCOに見守られ、ドキドキしながら検査を行っていましたが、今ではアスリートがリラックスできるような場づくりを心がけて検査に臨んでいます。親子ほど年が離れているせいか、緊張して尿が出ない場合でも、私が立ち会おうと上手くいくことが多いのは、とても嬉しいことです。

繁田 俊子さん

3. 国際総合大会DCO採用活動

Ⅲ 集合研修会

募集、
書類審査

養成
講習会

集合
研修会

研修会
(導入編)

研修会
(中級編)

研修会
(国際総合
大会編)

Point

「本番」を意識した 模擬実習



模擬研修ではミックスゾーンなども設置 可能な限り競技会検査に近い舞台を整えた

集合研修会は、2017年度および2018年度にかけて、計3回開催した。

集合研修会では、設備、プログラム、スタッフ等をふくめ、**可能な限り実際のドーピング検査に近いシチュエーションを会場内に設け、緊張感ある中での模擬研修を受講者に体験してもらうことを主眼に置いた。**

まず設備面では、合計で4つの検査室のほか、アスリートの待合室、8つの作業室を再現。その他、競技会場エリアには、本番と同様にミックスゾーンやDCOが入れない区域といった動線も設け、アスリートへの通告から検査終了に至るすべての場面を体験できるよう配慮した。

プログラム面では、検査対象の決定方式が異なる3競技を用意した。

陸上競技（短距離走）

ゴールした順位によって
検査対象を決定

ウェイトリフティング

全選手の試技終了後の合計点、
順位によって検査対象を決定

ラグビー

両チームからランダムで
検査対象を決定

開催概要

【期 日】 2017年度：2018年1月 2日間（於 東京都港区）
2018年度：A日程／2018年7月 2日間（於 東京都港区）
B日程／2018年8月 2日間（於 東京都港区）

【カリキュラム】

DAY1

- IDCO^{*1}へのインタビュー
- DCOグループディスカッション、現役検査員との時間
- 検査準備、開梱作業デモ、シャペロン^{*2}指導
- 模擬研修：通常検体
- 模擬研修：部分検体
- 模擬研修：追加検体

DAY2

- 模擬研修：外国人アスリート
- 模擬研修：18歳未満
- 模擬研修：部分検体
- 検体搬送デモ

*カリキュラムはA日程のもの。

*1 IDCO：International DCOの略。海外で行われる国際大会に派遣されるDCOが持つ資格。

*2 シャペロン(chaperon)：リードDCO/DCOの指示に従い、「通告」と「DCSへの誘導」を行う者。多くは大会ボランティアが行う。



現役検査員とのグループディスカッション



模擬研修では、陸上競技（上写真）やウエイトリフティング（下写真）など、検査対象の決定方式が異なる様々な競技の場面を想定し、アスリート役のスタッフを用意。

また、通常検体、部分検体、追加検体の他、検査対象が外国人アスリートの場合、18歳未満のアスリートの場合を加えた計5つのシナリオを用意し、受講者にはアスリートへの通告タイミングまでどのシナリオが割り当てられるか分からないようにした。

さらに、アスリート役のスタッフには、あえてドーピング検査に関する知識をまったく持たないボランティアを配置し、手続きの流れが分からないアスリートを誘導する役割を体験してもらった。また、外国人アスリート役には、外国人ボランティアを配置し、英語での検査対応の経験もできるようにした。その他、リードDCOおよび受講者の指導・実技チェックのため、現役DCOも多数参加した。

集合研修会終了後、現役DCOによる実技チェックの結果を参考にし、合格判定を行った。合格者は、これをもってDCOとして認定された。なお認定されたDCOには、シニアDCO同伴の下、OJTとして1～2回の実地研修を行った。

Interview

JADAの本気を見た

集合研修会2日間でトータル680分にもおよぶ模擬実習。

最初にカリキュラムを目にした時は、軽い目まいを覚えたほどでした。しかし、DCOとして現場に立つようになると、とても緻密に考え抜かれた内容であったことがよく分かります。さまざまな競技のパターンが用意されていたことも、その一つでした。また、アスリート役を務めていた人が検査中にクレームをつけてくるなど、実際に検査の現場で出くわすであろう事例が巧みに組み込まれていました。「JADAの本気」が詰め込まれた、1秒たりとも無駄のない、宝物のような時間であったと断言できます。

さらに集合研修会で印象に残ったのは、先輩DCOによる「ドーピング検査は尿を採取するだけではなく、選手を守るのが仕事だ」という心構えが必要」との言葉でした。これを聞いた時、アスリートの人生を左右しかねない重責を感じる一方で、アスリートの価値を高めることができ、ひいてはスポーツや世の中の価値を高めることにもつながるという意欲が湧きました。

研修会で使用したテキストは、今も検査の現場に必ず持参しています。一つは「初心を忘れないように」という意味で、もう一つは「慣れた頃が最も危ないぞ」という自身への戒めとして。いわば、私のお守りなのです。

倉持 幸太さん

4. 国際総合大会DCO育成活動

2017年度および2018年度に新たに認定されたDCOならびに2016年度以前にDCOとして認定され活動しているDCOを対象とし、「国際総合大会で活躍できるDCO」を育成すべく、2019年2月から2020年1月にかけて、研修会を実施した。

研修会は導入編、中級編、国際総合大会編の三段階で行い、今後の国際総合大会に向けて必要な能力、すなわち「自律性」、「スキル」、「チーム力」の向上を図った。

IV 研修会（導入編）



Point

**DCOの更なる
スキル&チーム力UP、
ホテルを利用した
競技会外検査実習**



2グループに分かれて行った英語研修

国際総合大会DCOの研修会（導入編）は、参加DCOを3つのグループに分け、各日程とも2日間にわたり実施した。本研修会の対象者には、2017年度以降に新たに養成されたDCOの他、2016年度以前に認定されたDCOのうち、国際総合大会DCOとして活動する意向を示した者も含まれている。

英語研修 スキル

各人の英語能力に応じて「Beginner」、「Advanced」の2グループに分け、ネイティブスピーカーの英会話講師を招き研修を実施した。英語力が必ずしも十分でないBeginnerクラスでは、検査に用いる専門用語を学ぶよりも、「もう少しゆっくり話してもらえませんか?」と相手に英語レベルを合わせてもらうフレーズなど、コミュニケーションをとるための手法に主眼を置いた。

JADA Questionnaire チーム力

JADAとDCOが同じ方向、目的に向かうチームであるとの関係づくりを目的として行った。検査の手続きに関する質問にとどまらず、アンチ・ドーピングに関する質問全般に答えられるよう、東京2020組織委員会からアンチ・ドーピング責任者、JADAから事務局長、検査部、教育部、結果管理部の担当者が出席した。

JADAが考える理想のDCO像

JADAでは、国際総合大会DCOに必要なとされる能力を次の3要素にまとめた。

スキル

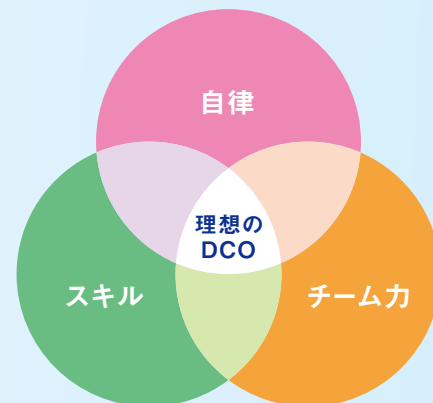
諸外国のアスリートやDCOと検査上で必要な会話ができる**英語力**を備え、かつ様々な状況の下で適切に対応できる**検査力**を高めることで、国際総合大会での活躍が可能となる。

チーム力

JADAとDCO、また各DCO間において、**一つのチームとしての意識**を持ちながら検査にあたることで、より円滑な検査活動を行うことができる。

自律

ドーピング検査の基本ルールである世界アンチ・ドーピング規程および国際基準などを理解し、各人が**自律的な判断**を下せるようになる。



導入編から国際総合大会編に至る研修会のすべてのプログラムは、これら3要素を高めることを意識しつつ、運営を行った。

開催概要

- 【期 日】 A日程／2019年2月 2日間（於 東京都千代田区）
B日程／2019年4月 2日間（於 東京都千代田区）
C日程／2019年5月 2日間（於 東京都千代田区）

【カリキュラム】

DAY1

- JADAアスリート委員による講話
- 東京2020に向けた動き
- ワークショップ：英語研修
- ワークショップ：JADA Questionnaire
- ワークショップ：チームビルディング

DAY2

- 競技会外検査模擬研修
- 血液検体採取手順講義
- 血液検体採取手順練習

*カリキュラムはA日程（競技会外検査有り）のもの。

チームビルディング チーム力

ドーピング検査は、検査日に様々な地域からDCOが集まって行われ、当日になって初めて顔を合わせる人とチームを組むこともある。その点が航空会社の客室乗務員も類似したチーム編成の業務内容であり、かつ接遇に関するノウハウを豊富に蓄積していることから、ANAシステムズ株式会社から講師を招き、「組織における人の重要性」、「組織におけるコミュニケーションの重要性」といったチームをまとめる手法について学んだ。

競技会外検査模擬研修 スキル 自律

競技会外検査模擬研修では、研修会場であるホテルの協力を得て、受講者たちが実際に泊まっている部屋を活用。競技会検査とは異なり、限られた設備・環境で検査を実施する手法を学んだ。受講者は2人1組となり、1人がアスリート役、もう1人がDCO役を務め、シニアDCOが指導役としてアドバイスを授けた。



宿泊ホテルを利用した競技会外検査実習（時事）

4. 国際総合大会DCO育成活動

V 研修会（中級編）

募集、
書類審査

養成
講習会

集合
研修会

研修会
（導入編）

研修会
（中級編）

研修会
（国際総合
大会編）

Point

ペーパーレス
システムの習得、
グループワークに
よる情報共有



MODOC操作の実習

国際総合大会DCOの研修会（中級編）は、2019年11月から12月にかけて、A日程、B日程の2回に分けて実施した。

ペーパーレストレーニング スキル

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会では、オリンピック・パラリンピックにおいてはじめて記録書類のペーパーレス化が導入される。また、今後の国際総合大会においてもペーパーレス検査の増加が予想される。そこで本研修会では、今後の国際大会に向け英語でのペーパーレスシステム（MODOC）導入研修を実施した。

冒頭、システム開発社であるPWC（Professional Worldwide Controls）から招いた講師による操作説明が行われた。続く操作実習では、各人にタブレット端末を提供し、2人1組のグループとなって操作・入力手順を確認した。トレーニングは全て英語で行われるため、グループ分けに当たっては、DCO相互でサポートができるよう、英語が得意なDCOと検査経験が豊富なDCOがペアとなるよう配慮した。

開催概要

【期 日】 A日程／2019年11月 2日間（於 東京都千代田区）
B日程／2019年12月 2日間（於 東京都千代田区）

【カリキュラム】

DAY1

- 東京2020に向けた情報共有
- Paper Less Training

DAY2

- Paper Less Training
- グループワーク

*カリキュラムはA日程のもの。



グループワークに先立ち、先輩DCOが自らの体験談を披露



グループワークのケーススタディでは、DCO間で議論が交わされた

グループワーク チーム力 自律

研修2日目には、自律したDCO育成の一貫として、ケーススタディを通じたグループワークを実施した。現場によって置かれる状況や環境が全く異なる中でスムーズに検査手続きを進めるためには、自身の経験値を高めることはもちろんのこと、他のDCOの経験を共有し、想定される事態に備えることも必要となる。そこで、グループワークの冒頭、経験豊富なDCOに、自身が経験したレアケースを披露してもらった。ケーススタディでは「尿意がまったくないアスリートの場合、どうすべきか」等、実際に起こったケースを元に7つの事例を用意した。1事例あたり10分程度、各グループで話し合い、その後に全体でより良い対応策について議論を交わした。

Interview

先輩DCOの飾らない姿に感銘を受けて

2018年に参加した養成講習会と集合研修会は、DCOに認定される前であり、JADA職員や講師の方々と私たちは“教え・教わる”関係でした。それが、導入編から始まる3つの研修会では、一緒に受講した先輩DCOも含め、全員が同じ目標に向かう“チーム”という雰囲気になっていたことが印象的でした。すでにバリバリと活躍している先輩もいれば、数年前に認定されたばかりの方もいて、雑談の中からもたくさんのヒントを得られたように思います。

その中で、私が特に覚えているのは、グループワークの冒頭で失敗談を披露してくださった一人の先輩DCOでした。年齢こそ私より若いものの、普段から私たち新人DCOに優しく接し、どんな質問にも丁寧に分かりやすく教えてくださる方でした。その方が大勢の前で、自身の失敗談を包み隠さず、決して大げさになることなく披露される姿をみて、「もし私が選手だったら、この方に検査をお願いしたい」と思いました。

検査は人がすることであり、誰でも失敗することはあります。大切なのは「失敗した後のリカバリー」。研修会を通じて、いろいろなアクシデントへの対応策やその根拠となる規程についても学ぶことができました。その意味ではDCOとして一段階前進することができたように感じています。

小林 明美さん

4. 国際総合大会DCO育成活動

VI 研修会（国際総合大会編）

募集、
書類審査

養成
講習会

集合
研修会

研修会
（導入編）

研修会
（中級編）

研修会
（国際総合
大会編）

Point

パラスポーツの理解促進、
東京2020の手續確認、
ペーパーレス
システムの習熟



パラスポーツ関係者を講師に招いて実施したパネルディスカッション

2020年1月から2月にかけて、国際総合大会DCO研修会（国際総合大会編）を2回に分けて実施した。本研修会には、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会において活動する意向を有し、かつ相応しいスキルを備えたDCOが参加した。

パラスポーツについて 自律

研修会1日目には、パラリンピックでの検査に対応するためのパネルディスカッションを行った。障がい者スポーツの競技団体関係者をパネリストに招き、四肢障がいや視覚障がい、脳性麻痺等、障がいの内容によって想定される検査時の対応が異なること、検査時の注意点を、事例を交えて紹介。アスリートの状況を把握し、個別に対応する必要性を再確認した。

開催概要

【期 日】 A日程／2020年1月 2日間（於 東京都千代田区）
B日程／2020年2月 2日間（於 東京都千代田区）

【カリキュラム】

DAY1

- パラスポーツについて
- 検査室運営
- 大会特有検査手順
- 選手村での競技会外検査
- イレギュラーな対応
- メディカル部門との連携

DAY2

- ボランティアへの接し方
- DCSM^{*1}/CC^{*2}セッション
- ペーパーレスシステム実技練習

※1 DCSM：Doping Control Station Managerの略。検査室の責任者。

※2 CC：Chaperone Coordinatorの略。
シャペロンの管理・指揮をする役割。



東京2020でDCOが着用するユニフォームを会場に展示



東京2020でも使用される
ペーパーレスシステムの実技練習



東京2020での検査実施体制レクチャー

東京2020期間中の対応 スキル

1日目から2日目にかけて、東京2020組織委員会による、大会期間中の対応についてのレクチャーを実施した。検査室の運営方法や大会特有の検査手順、メディカル部門やボランティアとの連携方法といった検査に直接関連する事柄に加え、大会ユニフォームの配布時期・場所、大会時のゴミの分別方法といった大会全般に関する事柄についても説明が行われた。また、研修会会場の入り口には大会本番でDCOが実際に着用するユニフォームを展示し、参加者の意欲、意識を高めた。

ペーパーレスシステム実技 チーム力 自律

研修会2日目は、ペーパーレスシステムの実技練習を行った。中級編では2人1組で基本的な取り扱い方法を学んだが、本研修会では9人程度のグループを組み、アスリートへの通告から検体搬送まで、検査全体の流れを確認するという、より実践的な内容とした。

Interview

もうひとつのレガシー

私がDCOに認定された2016年当時、応募者のほとんどはスポーツに関わりのある方ばかりでした。今回、2018年認定のDCOと一緒に研修会を受講したところ、一般企業の会社員や主婦の方もいて、それぞれのバックグラウンドが多様なことに、まず驚かされました。よく「オリンピックのレガシー」と言われることがありますが、このようなアンチ・ドーピングに関わる人材のすそ野の広がりもまた、レガシーの一つだと思います。

活動を始めてからまだ4年あまり。初対面の方には「見た目はシニアですが、中身はまだジュニアです」と挨拶するほど、学ぶことの多い日々です。導入編では、英語で話すのが苦手な私にとって、試合に負けた直後など相手が不機嫌な時に使えるフレーズ等を教えていただき、非常にありがたかったです。また、中級編で初めて体験したペーパーレスシステムの操作には戸惑いましたし、国際総合大会編では私がまだ体験したことのない視覚障がいや知的障がいをを持ったアスリートへの対応について、貴重な話を聞くことができました。

根が心配性なものですから、事前の準備はいつも念入りに。研修会で得た「気づき」や「学び」を繰り返し自分の中で咀嚼し、大会終了後には海外から来たアスリートの皆さんから「Thank you!」と、気持ちよく帰っていただけるようなお手伝いがしたいと考えています。

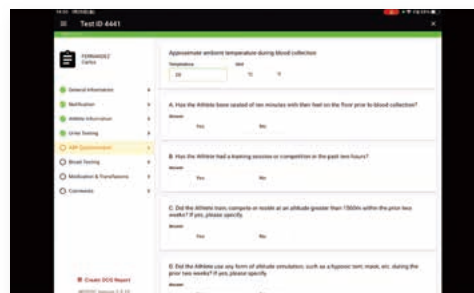
小川 敦さん

5. 東京2020に向けた直前の取組

I ペーパーレスシステムオンライン研修

Point

「DCO間サポート制度」で さらなるスキルアップ



ペーパーレスシステムによる入力画面

新型コロナウイルス感染症拡大による東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催延期を受け、本来は対面で実施予定であったペーパーレスシステムの研修を、オンラインで実施した。

詳細

同大会に参加予定のDCOにタブレットとWi-Fiルータを1台ずつ貸与し、一週間ごとに1つ、本大会で行う検査事例を想定した課題（合計8課題）を配信し、DCO各自で取り組んだ。さらにステーションマネージャー（DCSM）候補者に対しては、ペーパーレスシステムを使用した検体搬送の課題も行った。各課題ごとに解説動画を用意し、正しい操作手順やタブレットの基本操作を学んだり、DCOから寄せられた質問への回答を全体共有することで、オンラインであっても操作手順を習熟できる工夫を行った。

また、タブレット操作に慣れているDCOと慣れていないDCOがペアを組み、ペーパーレスシステムの操作手順等をレクチャーする「DCO間サポート制度」を設置した。最終的には25組がこの制度を利用し、オンライン等でペーパーレスシステムの操作手順やタブレット操作についてさらに深く学ぶ機会を設けた。

開催概要

【期 日】 2020年12月～2021年2月

【カリキュラム】

- | | |
|------------------------------------|-----------------------------|
| ●【課題1】トライアスロンでの競技会検査を想定（尿検査・通常検体） | ●【課題5】競技会外検査を想定（尿血液検査・通常検体） |
| ●【課題2】体操での競技会検査を想定（尿検査・部分検体） | ●【課題6】各DCOごとに個別の検査内容を想定 |
| ●【課題3】競技会外検査を想定（尿検査・追加検体） | ●【課題7】競技会外検査を想定（尿血液検査・部分検体） |
| ●【課題4】レスリングでの競技会検査を想定（尿検査・追加&部分検体） | ●【課題8】競技会外検査を想定（尿血液検査・追加検体） |

DCO間サポート Voice

血液検査時に気をつけること、起こり得る質問や、受け答え等も含め、詳しく教えてもらった。一連の検査の流れを確認しつつ、システムへの入力のタイミングも確認できた。

ペーパーレスシステムの基本的な使い方に加え、タブレットの便利な使い方も教えてもらい、検査時間の短縮につなげることができた。

Ⅱ ペーパーレスシステム 模擬研修

Point

大会会場を使用した リハーサル



本番同様に、DCSM役を中心として模擬検査が進められた

大会の開催を1ヵ月後に控え、選手村内のドーピング検査室を用いた模擬研修を実施した。本研修会はコロナ禍の影響を鑑み、感染対策を施した上で、1回あたり20～25人程度の少人数で計10回に分けて開催した。

研修では、通告～競技者情報入力～検査室での検査手順に至る一連の流れを、実際使用する予定の通告書、検査キットを使用しながら、タブレットを用いて学習した。

詳細

参加者を2つのグループに分け、1グループを一つの競技会検査に参加するDCOメンバーと想定し、本大会同様にDCSM役、シャペロンコーディネーター(CC)役、DCO役、アスリート役を設定して、各役割ごとの動きやペーパーレスシステムの操作方法を学んだ。

アスリート役には事前に用意した10程度のシナリオ(例:一度の尿採取量が不十分なケース、3回の針刺しでも採血が完了できないケースなど)を渡し、DCO役が、オンライン研修で実施した課題の復習に加え応用操作を経験する機会ができるよう配慮した。

開催概要

【期 日】 2021年6月(於 東京都中央区)

【カリキュラム】

- 研修会概要説明
- 模擬ミッション(前半)
- 質疑応答
- 模擬ミッション(後半)
- 質疑応答



参加DCOがアスリート役と検査員役を交互に実践した

検査物品は、本番と同様のものを使用

6. 国際総合大会BCO採用・育成活動

I.Ⅱ 募集、書類審査

募集、
書類審査

養成
講習会

最終
審査

Point

SCO資格を有する BCOの育成



国際総合大会BCOの養成講習会は、2019年6月と7月の2度に分けて開催した。東京2020ではBCOとしての業務のみならず、通告および採尿業務を行うSCO (Sample Collection Officer) としての役割が求められるため、新規エントリーの他、すでにBCO資格を有する者も受講対象者とし、「通告」、「採尿立会い」を学習してもらうこととした。新規の募集に際しては、東京都看護協会の協力を得て、告知を行った。認定者についてはただちに現場での活動をスタートしてもらうとともに、Eラーニングを通じて継続的に学習の機会を提供した。

養成講習会概要

【期 日】 A日程／2019年6月（於 東京都中央区）
B日程／2019年7月（於 東京都中央区）

【カリキュラム】

●医療現場との違い	●BCOと医師の連携	●採血合併症とその対策
●血液検体採取デモ	●書類の記入方法	●ワークショップ

Interview

大好きなスポーツに携われる喜び

実際に養成講習会を受講して感じたことは、手順が非常に細かく設定されていること。採血の流れ自体は通常の看護業務と変わりませんが、その前後に行うべき手続きの繊細さに、「スポーツのクリーンさを守る責任」を強く実感しました。アスリートの皆さんは、通告の際に自身の権利と責務を読み上げるよう求められますが、BCOである私も、その「責務」の一端を担っていると思うからです。

子育てをしながら活動しているため、私が担当するのは長期間の滞在を必要としない競技会外検査がほとんど。テーブルや椅子がない状況で採血しなければならないケースも多く、看護業務の基本である「自分が作業しやすい環境づくり」を常に心がけています。

2019年のラグビーワールドカップでは競技会外検査で参加しました。東京2020に向けても、できる限り活動したいと考えています。BCOは責任の重い役割ではありますが、同時にクリーンなスポーツのために役に立っているという喜びが、私の原動力になっているのです。

大谷 優美さん

7. 国際総合大会へのDCP派遣実績

JADAでは、育成したDCPの更なるスキル向上と国際経験の蓄積を図るため、加えて国際貢献の観点からも、国内外で開催される国際総合大会等へDCPを派遣している（派遣大会一覧は下表のとおり）。ここでは2017年度以降の大会に参加したDCPの体験談（学びや気づき）を紹介する。

派遣大会一覧（2017年度以降）

大会名	派遣期間*	インタビュー（座談会）
第29回ユニバーシアード競技大会（2017／台北）	2017年 8月	—
第5回アジアインドア&マーシャルアーツゲームズ（2017／アシガバット）	2017年 9月	—
第23回オリンピック冬季競技大会（2018／平昌）	2018年 2月	—
平昌2018パラリンピック冬季競技大会	2018年 3月	P.15
第18回アジア競技大会（2018／ジャカルタ・パレンバン）	2018年 8月～ 9月	P.16
第9回ラグビーワールドカップ（日本）	2019年 9月～11月	P.16
第17回世界陸上競技選手権大会（ドーハ）	2019年 9月～10月	P.17
第30回東南アジア競技大会（フィリピン）	2019年11月～12月	P.17
第32回オリンピック競技大会（2020／東京）	2021年 7月～ 8月	P.20-23
東京2020パラリンピック競技大会	2021年 8月～ 9月	P.20-23

*派遣期間は各DCPによって異なる。

平昌2018パラリンピック冬季競技大会

▶大会期間：2018年3月9日～18日 / 参加選手数（国・地域数）：569人（48カ国・地域）



写真：AP/アフロ

Interview

パラリンピアン「人間力」を再認識



石田 裕子さん

パラリンピックへの参加は2010年バンクーバー冬季大会、2012年のロンドン大会に続いて3度目。パラリンピアンたちの「人間力」の高さは前から感じていましたが、平昌冬季大会は、いつも増してその印象を強く抱きました。

検査対象となるアスリートは必ずしもメダリストばかりではありません。敗戦の悔しさでいっぱいの方、疲労困憊の方も少なくありませんが、全員が積極的に検査に応じてくださいました。パラリンピアンの方々は、障がい乗り越え、懸命に努力を積み重ねて国内の競争を勝ち抜き、この晴れ舞台に立つことができた方ばかり。待合室で物珍しそうにキョロキョロと辺りを見回す仕草から「検査を受けられる立場になった喜び」が全身にあふれ出ていました。そうしたアスリートの検査を担当できるのは、検査員冥利に尽きる経験でした。

検査員の宿舎では、南アフリカ、ウクライナのDCOと同部屋でした。雪を初めて見たという南アフリカのDCOと雪ダルマを作ったり、他愛のないよま話をしたのは良い思い出です。

オリンピック・パラリンピックでは、アスリートだけでなく、多くの検査員が海外からやってきます。東京2020では、彼らに「いい大会だったね!」と思ってもらえるよう、全力でサポートに当たりたいと考えています。

7. 国際総合大会へのDCP派遣実績

第18回アジア競技大会(2018／ジャカルタ・パレンバン)

▶大会期間：2018年8月18日～9月2日 / 参加選手数(国・地域数)：11,300人(45カ国・地域)

Interview

見習いたい「真面目さ」



写真：ロイター/アフロ



國分 裕二さん

DCO歴13年の私ですが、海外での活動は初体験。片言の英語しか話せませんが、今後日本での国際総合大会が増えることから派遣メンバーの1人に選ばれたのかと思います。

大会では、自転車競技を中心に3競技の競技会、競技会外検査を担当しました。私が所属したチームは、多少の入れ替わりはあったものの、PWCから派遣されたドイツ人のクラスターマネージャー、アメリカ人のリードDCO、現地のDCOとシャベロン、そして私ともう1人のDCOという国際色豊かな構成でした。最初のミーティングでは、拙いながらもできるだけ多く発言するよう心がけました。おかげで自分の語学レベルが皆に伝わり、それ以降のコミュニケーションが取りやすくなったように思います。

活動を通じて私が強く感じたのは、クラスターマネージャーとリードDCOの、検査に対する「真面目さ」です。当たり前のことですが、世界アンチ・ドーピング規程に則った厳格な運用がなされ、ダブルチェックも徹底していました。

日本の検査体制が悪いわけでは、もちろんありません。実際、検査が始まって数日後には我々日本人DCOの仕事ぶりを評価し、ある程度任せてくれるようになりました。ただ、国際大会ならではの厳格さを実感し、帰国後からは「国際総合大会仕様」を念頭に置いて検査に当たるよう心がけています。

第9回ラグビーワールドカップ(日本)

▶大会期間：2019年9月20日～11月2日 / 参加選手数(国・地域数)：620人(20カ国・地域)

Interview

思い出は「何も起こらなかった」こと



写真：長田洋平/アフロスポーツ



青木 哲哉さん

今大会では、各会場に2名のDCOが固定、その他のDCOはローテーションで各会場に配置されました。シャベロンは試合ごとに3名が配置されました。私は会場固定のDCOとしてアサインされました。

個人的に大会を振り返るならば、「取り立てて語るエピソードもなく終わった大会」。リードDCOのみ、主管であるワールドラグビーから派遣された外国人でしたが、その方とのコミュニケーションさえ上手く取れば、通常の国内競技会と変わるところはありません。大会後、ワールドラグビーから「日本のDCOは丁寧で最高」と評価されたと聞き、実際に滞りなく検査できたのだと思います。

私は、シニアDCOとして活動するようになった2年ほど前から、チームマネジメントをとりわけ意識するようになりました。特に意識しているのは「責任者が偉すぎずは駄目」ということ。チームの誰もがフラットな意見を言えるような雰囲気、組織づくりを常に心がけています。東京2020では、海外から多くの検査関係者が訪れるため、今大会とは勝手が異なる部分もあるでしょう。しかし、決して舞い上がることなく、「基本に忠実に」をモットーに、何事もなく大会が終えられるよう取り組みたいと思います。

第17回世界陸上競技選手権大会(ドーハ)

▶大会期間：2019年9月27日～10月6日 / 参加選手数(国・地域数)：1,772人(206カ国・地域)

Interview

初めてのペーパーレス体験



島田 見佳子さん

今大会の検査では、ペーパーレスの検査体制が取られ、私を含む日本人DCOも初めてタブレットでの操作方法をレクチャーされました。実際の運用場面では、突然通信障害が起こって情報が反映されない、追加検体を取った選手の1検体目のデータが消えてしまっていた等のハプニングもあったようですが、扱いに慣れれば非常に有用なシステムだと感じました。帰国後はJADAにも報告し、情報を共有しました。今後使用する場面はますます増えると思うので、貴重な経験となりました。

私が加わったチームは、私以外の全員が現地のDCOやシャペロンばかりでした。ブリーフィングでは当然アラビア語のほうで会話は通じやすいはずですが、すべて英語で行われていました。

大会を通じて、現地のDCOやシャペロンから感じられたのは、「皆で大会を成功させよう」という強い気持ち。チーム内の意見交換用アプリ“Whats App”には、具体的な注意点のみならず、仲間への感謝の気持ちなどがたくさん綴られていました。また現場でミスやハプニングが起きても、皆でカバーし合う姿が数多く見られ、チームワークの大切さを再認識しました。

オリンピックやパラリンピックといった大きな大会では、検査員にもかなりのストレスがかかるはず。だからこそ私たちも「チーム」として助け合っていきたいと思います。



写真：AP/アフロ

第30回東南アジア競技大会(フィリピン)

▶大会期間：2019年11月30日～12月11日 / 参加選手数(国・地域数)：5,630人(11カ国・地域)

Interview

「学ぶ意欲」を学ぶ



落合 崇史さん

私を含め本大会に派遣されたDCOには、自身の国際経験を高めることはもちろん、現地検査スタッフへの教育啓発というミッションも与えられていたように思います。事実、現地の検査責任者をはじめ、DCO、BCO、シャペロンといったスタッフは皆若く、経験も十分でない人がほとんどでした。また、「検査室です」といって案内された部屋に設備が全く整っておらず、テーブルの設置や仕切りといった設営を一から手掛けるなど、国内では味わえない体験もありました。

ただ、私が最も感銘を受けたのは、彼らの「学ぶう」とする意欲と姿勢です。確かに現時点では日本のほうが彼らと比べて進んだ知識と経験を持っているかもしれませんが、10年、20年後には私たちが教わる側に回っていても何ら不思議はありません。実際、最初はガチガチに緊張していたDCOも、最終日には検査員らしく振舞い、またチームとしても上手く機能するようになっていました。

私自身、シニアDCOとして活動するようになって、まだ数年です。リードDCOとしての活動も、この大会が初めての経験でした。もっと多くの国際大会を経験し、より検査の進んだ国の知識・経験を共有したい。そしてその知見を日本やアジアの国々に伝えていきたいと決意する、よい契機となりました。



写真：AP/アフロ

7. 国際総合大会へのDCP派遣実績



齊藤 直人さん

2011年認定のシニアDCO。オリンピック、パラリンピックともに競技会検査のDCSMを務めた。



小松 美穂さん

2017年認定のDCO。オリンピック、パラリンピックともにCCを務めた。



宮武 宏光さん

2018年認定のDCO。オリンピックでは8会場、パラリンピックでは4会場でDCOとして活動した。



米倉 由佳さん

2019年認定のBCO/SCO。オリンピック、パラリンピックともに多くの会場でBCOとして活動した。

東京2020での 活動を終えて DCP 座談会

東京2020オリンピック・パラリンピックでは、JADAが養成した数多くのDCPが海外のDCOと共にドーピング検査を行い、クリーンな大会の実現に貢献した。DCSM、CC、DCO、BCOといった様々な立場で携わったDCPに、大会でのエピソード、活動を通じて得られたものを語り合っていた。

Topic

東京2020に向けた準備

東京2020へ臨むにあたり、 どのような準備をされましたか？

齊藤 ▶ ドーピング検査では、通常と異なる手順を取った場合、その内容を報告書に残さなければなりません。そこで、発生が想定され得る特殊なケースの報告定型文を、日本語版、英語版ともに数多く準備しました。

また、私が担当したパラリンピックの競技会検査は、視覚障がいのアスリートが参加する競技でした。そこで弱視の方のためにiPadの白黒反転機能を使いこなせるよう、

チームの検査員に伝えました。実際には、その機能が必要になるケースはありませんでしたが。

検査室の責任者であるDCSMとしては、競技を終えて疲れているアスリートの負担をできる限り減らし、1秒でも早く検査室から出してあげたい。そのためにできる準備を心がけました。

小松 ▶ 2018年にジャカルタ・パレンバンで行われたアジア大会、2019年のラグビーワールドカップといった国際大会に参加させていただきました。特にDCOの認定直後に派遣されたアジア大会は



▲ 検査室の入り口に折り紙を展示し、アスリートの緊張を和らげた

強く印象に残っています。様々な国から集まったDCO、現地シャペロンの方々とコミュニケーションを取りながら、一つのチームとして検査を終えた経験は、東京2020に向けた自信につながりました。

一方、パラスポーツについては、これまであまり検査の経験がなく、不安もありました。ただ、JADAの研修会でパラスポーツについて学ぶ機会が得られたのはよかったです（※編注 12ページ参照）。先輩DCOからの「パラリンピアンは、自分のことは自分でできる方が多いので、必ず手伝いが必要と考えなくてもいい」との一言は、私の心を楽にしてくれました。

米倉 ▶ 私は2019年にBCOとして認定されたばかりで、東京2020が初めての国際総合大会でした。コロナ禍によって仕事の休みが多くなったおかげで、東京2020前に様々な検査の機会を得られたことは幸運だったのかもしれませんが。時には「こんな状況で検査できるの?」というような場面でもベテランのDCOの絶妙なサポートで乗り越えることができました。東京2020への自信というよりも「皆さんがいるから大丈夫!」という安心感を強く感じました。

宮武 ▶ 私のDCO認定は2018年ですが、始まる前は不安のほうが勝っていました。というのも、養成講習会で大きな失敗をしてしまい、認定自体されないのではないかと不安を抱いていたからです。認定された後も、「選手の一生を左右しかねない検査を自分が受け持てているのか」という葛藤がありました。

それでも、東京2020への参加が決まったからには、「同じ失敗は絶対にしない!」と決意し、メモに取った改善点や注意点を復習して大会に臨みました。



▲東京2020の成功を陰で支えたDCP

齊藤 ▶ 宮武さんの気持ちはとてもよく分かります。ただ、失敗は必ず起こるものです。エラーが起きた時に、どう修正し、「失敗しても大丈夫なんだ」という雰囲気を作るのがリーダーであるDCSMの役割なのだと思います。

Topic

オリンピック、 パラリンピックならではの出来事

齊藤さんは様々な国際大会も経験していらっしゃいますが、オリンピック・パラリンピックでの活動は初めてだったそうですね。

齊藤 ▶ 大会の規模が他の大会とはまったく異なりしました。例えば検査のマネジメントをする際、通常の大会であれば会場の担当者1人と話し合いをすれば事は済むのですが、東京2020ではその他に会場マネジメントの担当、表彰式の担当、メディカルの担当等々、非常に多くの部署との折衝が必要となります。大会が始まった当初は仕事量の多さに戸惑いました。

そこで効率的なマネジメントに役立ったのが、DCSMオフィスに設置されたホワイトボードの活用でした。検査対象者の名前と国籍、担当するDCOとシャペロンの名前、検査の進捗状況等をリスト化し、マネジメントがスムーズになりました。また、シャペロンのシフトや食事が済んだかどうかといった細かな情報も含め、すべてボードに書き出すことによって、各シャペロンが今なすべきことを理解し、行動できるようにしました。

実はこの方法は、前回のリオデジャネイロ大会を経験したIDCOから提案してもらったものです。チームの中にはフランスのIDCOもいたので、次のパリ大会にもこのノウハウは生かされることでしょう。こうしたDCO間の積極的な意見交換も、オリンピック・パラリンピックならではの活動だったかと思います。

宮武さんは数多くの競技、会場でDCOとして活動されましたね。

宮武 ▶ はい。私がいた会場ではホワイトボードの活用はありませんでしたが、DCSMによって様々なマネジメントの

7. 国際総合大会へのDCP派遣実績

工夫がなされていました。そうした知見が、個人や特定チームだけでなく、組織全体に活かされるといいですね。

私自身は、オリンピック・パラリンピックを合わせて32日間、選手村を含めて12会場で検査を担当しました。大会を通じて、私が特に意識していたのは「落ち着く」ことです。大会が始まって2日ほどたった頃、いつもと比べて興奮して検査に臨んでいる自分に気づきました。選手が大舞台で高ぶるのは分かりますが、検査する側がそれに付いてはいけません。事前の研修では「通常尿検体採取手順は20分以内、尿及び血液検体採取手順は30分以内」を目安にプロセスを進めるよう指導されていましたが、選手も急いでおらず、検査室も混んでいないようであれば、少し時間がかかっても落ち着いて確実に検査するよう心がけました。

小松さんが大会を通じて特に印象に残ったエピソードを教えてください。

小松 ▶ 私がシャペロンコーディネーターを担当したオリンピックの競技会検査では、DCSMが海外の方だったこともあり、日本人のシャペロンたちとの間に立ってコミュニケーションを図る作業は、想像以上に大変でした。シャペロンはボランティアですから、何人集まるか、何時まで活動できるかはその時になってみないと分かりません。またシャペロンには公共交通機関で帰ってもらえるように配慮する必要もありました。大会が終わって1カ月たった今でも夢に出てくるほど(笑)、調整に追われた日々でしたね。オリンピック以上の慌たしさは恐らくないでしょうから、今後どんな状況に出くわしたとしても、臨機応変に対応できるのではないかと思います。

齊藤 ▶ 私がいた会場でもシャペロンを終電に間に合うように帰したため、検査員総出で通告に行ったことがありました。

シャペロンの存在は検査にとって非常に重要です。私は、検査室の場所が分からないシャペロンが多かったことから、手書きのマップを大量にコピーしてチェックイン担当の方にお渡しし、迷ったシャペロンに配ってもらうようお願いしました。おかげで仕事がよりスムーズに進むようになったと思います。



▲DCSMを中心とした綿密なミーティングによりスムーズな検査遂行に備えた

米倉さんは、オリンピック・パラリンピックともBCO／SCOとして参加されましたね。

米倉 ▶ パラリンピックは、私にとって気づきの多い大会となりました。

例えば血液検査の時には「足を床につけた状態で10分間着席していましたか」という設問があり、イエスカノーしか選択肢がありません。そうすると、足が欠損しているアスリートにとっては「どちらを選べばいいか分からない」わけです。また採血をする針は2種類用意されているのですが、もっと細い針でなければ採血が難しいケースもありました。今後は、パラスポーツ特有の事情を考慮して、ルールに基づいた運用の変更が必要であると感じました。

パラリンピックで私たちが取り組んだのは、「BCO皆でやる」工夫です。アスリートによっては、針の角度や身体位置といった微妙な加減をしなければ採血がうまくできない場合があります。基本的に採血は1人で行うものですが、そういった時には2～3人のBCOが協力するとスムーズに採血できるのです。そうした協力体制ができあがってからは、採血が必要な部屋やBCOがいる部屋が一目で分かるようなマークを作るといった仕組みが作られていきました。

齊藤 ▶ いまのお話は、とても興味深いですね。通常の検査でBCOを複数手配することは難しいでしょうから、私たちDCOに協力できること、「ここまでではやって欲しい」といったリクエストをもらえれば、よりスムーズに検査できるかもしれません。

Topic

これからの検査に生かしたいこと

最後に、大会を通じて得たもの、
今後に生かしたいことについてお聞かせください。

齊藤 ▶ 個人的には、大会前のいろいろな準備、会場の下見など、もう少し事前にできたことがあったのではないかなという思いが強いです。

DCSMとしては、必ずミッションを達成するというプロ意識を検査員一人ひとりが持つよう、思いをもっと伝えたかったです。失敗を恐れず、しっかりと自分に課せられた役割を果たすことが、大会の成功につながるのだと思います。

米倉 ▶ たくさんの会場で様々なDCPと仕事をさせていただく中で、私が感じたのは「100点は無い」ということです。自分としては満点だと思っても、文化や視点によってはそうではない場合もあります。100点ではないからといって落ち込む必要はないけれど、100点を目指して努力しなければならない。そう感じた大会でした。

宮武 ▶ これまでの自分は、あまり感情を表に出さず、率先して発言する機会も多くありませんでした。しかし今回、世界中からやってきた検査員やアスリートと触れ合う中で、コミュニケーションの重要性を痛感した大会でした。これからは自分の考えや感情をもう少し表現していきたいと思います。

小松 ▶ 普段のJADAの検査でも思うことですが、リーダーの役割を担う人は全体をよく見ているな、と感じました。彼らからは、CCやDCO、BCOを含めた動きをよく観察しつつ、「何があっても最終的な責任は自分が取る」という気持ち、言葉の端々からうかがえました。私自身、DCSMになるにはまだまだ修行が足りないと思い知らされましたが、先輩方の背中を見ながら、これからも学び続けていきたいと思います。



▲齊藤さんの検査チームが検査終了後、IDCOへ手渡した写真立てと手紙

Pick Up!

海外DCOも東京2020で活躍

JADAでは、主にアジア各国・地域のDCO育成の一環として、日本で実施されるドーピング検査にIDCOを招へいする事業を2013年から手がけてきた。その中で、東南アジア地域より、東京2020にDCOとして参加したTAN EU LIN EVELYNさん(2017年招へい／マレーシア)、TANG KWAI FONGさん(2019年招へい／シンガポール)にお話をうかがった。

Voice

TAN EU LIN EVELYN さん(左)

東京2020は今までに経験したことがない規模での検査で毎日刺激を受けました。

TANG KWAI FONG さん(右)

2019年に一緒に検査をしたJADAのDCOと再会し、また一緒に検査ができ嬉しかったです。



8. 資料

ここでは、国際総合大会DCPの育成にあたり作成、使用した教材、ツールのうち、主なものを紹介する。

テキスト

DCO養成講習会 テキスト 「はじめてのドーピング・コントロール」

新規国際総合大会DCOの養成を目的として2018年に作成し、主に養成講習会の教材として使用した。DCO業務の基礎となる手順の説明を中心に、世界のアンチ・ドーピング体制等、アンチ・ドーピングを取り巻く周辺知識を図解を交えて解説している。



●テキスト掲載項目

第1章 アンチ・ドーピング概論	第6章 検体封印	第10章 検体搬送
第2章 検査概論	第7章 検体封印後の書類作業	第11章 血液検体採取
第3章 通告	第8章 部分検体採取	第12章 障がいや伴う競技者への対応
第4章 DCS到着～通告書記入	第9章 追加検体採取	
第5章 採尿立会い		

BCO養成講習会 テキスト 「はじめてのドーピング・コントロール」

アンチ・ドーピングおよびBCO業務に関する基礎的な知識を獲得し、共通の手順に関する理解を促進することを目的として2019年に作成。BCO業務の基礎となる手順の説明を中心に、アンチ・ドーピングを取り巻く周辺知識を図解を交えて解説している。



●テキスト掲載項目

第1章 アンチ・ドーピング概論	第6章 障がいや伴う競技者への対応
第2章 検査概論	第7章 血液検体採取
第3章 通告	
第4章 DCS到着～通告書記入	
第5章 採尿立会い	

スライド

DCO養成講習会・BCO養成講習会用スライド

DCO養成講習会およびBCO養成講習会において講師が使用したスライド。テキストの内容をコンパクトに再構成し、要点をまとめた。



DCO養成講習会スライド
(図は採尿立会い手順)



BCO養成講習会スライド
(図は血液検体採取)

動画

検査手順動画

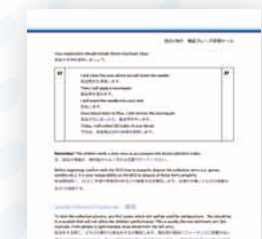
講習会およびEラーニングで使用。アスリートへの通告から検体搬送に至るまでの検査手続きの流れを分かりやすく解説。テキストと章立てを合わせることで自宅でも学習する際にも参照しやすくなった。



オンライン教材

BCO向け英語学習ツール

BCOが外国人アスリートを検査する際によく用いられるフレーズを英文と訳文を併記して紹介。採血した血液量の不足といった予期せぬアクシデントについての例文も掲載している。



Sample Collection at Major Events

国際総合大会におけるドーピング検査について英語で学習するEラーニング。英語のスキル向上だけでなく、国際大会でのチームビルディングについても学ぶことができる。



9. 国際総合大会DCP育成に関する活動年表

国際総合大会DCP育成に関する活動年表

期日	採用・育成活動	国際総合大会等への派遣
2017		
8月	—	第29回ユニバーシアード競技大会（2017／台北）
9月	—	第5回アジアインドア&マーシャルアーツゲームズ（2017／アシガバット）
9月～10月	DCO募集	—
11月	DCO養成講習会を開催	—
2018		
1月	DCO集合研修会を開催	—
2月	—	第23回オリンピック冬季競技大会（2018／平昌）
2月～3月	DCO第一次募集	—
3月	—	平昌2018パラリンピック冬季競技大会
4月	DCO第二次募集	—
6月～7月	DCO養成講習会を開催	—
7月～8月	DCO集合研修会を開催	—
8月	—	第18回アジア競技大会（2018／ジャカルタ・パレンバン）
2019		
2月～5月	DCO研修会（導入編）を開催	—
5月	BCO募集	—
6月～7月	BCO講習会を開催	—
9月～11月	—	第9回ラグビーワールドカップ（日本）
9月～10月	—	第17回世界陸上競技選手権大会（ドーハ）
11月～12月	DCO研修会（中級編）を開催	—
11月～12月	—	第30回東南アジア競技大会（フィリピン）
2020		
1月～2月	DCO研修会（国際総合大会編）を開催	—
12月～翌年2月	ペーパーレスシステムオンライン研修を開催	—
2021		
6月	ペーパーレスシステム模擬研修を開催	—
7月～8月	—	第32回オリンピック競技大会（2020／東京）
8月～9月	—	東京2020パラリンピック競技大会

*表中の青文字はDCO、緑文字はBCOに関する活動を示す。

2017 2018 2019

